第6学年 国語科学習指導案

1 単元名 学習したことを生かして

主教材「海の命」(立松和平 作 光村6下) 副教材「山のいのち」(立松和平 作 ポプラ社)

2 単元の目標

- 物語の読み取り方をつかんで読みを深めるとともに、物語を読み味わうことができる。
- シリーズ作品を読むことを通して、学習した物語の読み取り方を生かすことができる。

3 単元の評価規準

◎ 進んで物語を読み、読書を楽しもうとしている。

【国語への関心・意欲・熊度】

- ◎ 場面設定や登場人物の関係、物語の構成などを叙述に即して読み取り、物語の主題について自分の考えをもつことができる。【読む能力】
- ◎ 学習課題や物語の主題に対する自分の考えを書くことができる。

【読む能力】

○ 言葉の使い方に興味をもち、表現の工夫に気付くことができる。

【言語についての知識・理解・技能】

4 単元と児童

(1) 単元及び教材について

主教材である「海の命」は、海を舞台にして、主人公太一の成長が描かれている物語である。 漁師の子として生まれた太一は、小さい頃から父と同じ漁師になることを夢見ていた。しかし、 父は、巨大なクエを捕ろうとして死んでしまう。父の死後、与吉じいさの下で成長した太一は、 ある日、巨大なクエと対峙する。クエを殺さなかった太一の行動や「千匹に一匹でいいんだ」 と語る与吉じいさの言葉は、「自然と人間との共生」について読者に考えさせる。

副教材である「山のいのち」には、山での出来事をきっかけに主人公静一の心が変化する様子が描かれている。学校へ行かず、人と話さない静一は、夏の間、山に暮らす祖父のもとに預けられることとなった。祖父は、ヤマベを捕るためにイタチを殺した。「イタチの肉も魚のえさだ」「たべたりたべられたり。山のものはなにもむだがなくて、ぜんぶがぐるぐるとまわっているんだよ」と語る祖父。ここにも「自然と人間との共生」というテーマが見えてくる。

「いのち」や「人間と自然との共生」というテーマは、思春期に入り大人に近付こうとしている児童にとって、自分の意見をもつのにふさわしいと考える。また、どちらの物語も主人公は少年であり児童と年代がほぼ同じであることも、興味をもって読み進めることができるであろうと考えている。

物語の構成は、冒頭から山場、結末までが分かりやすく、物語の基本構造にのった典型的な型であり、今までの学びを生かし、さらに読み取り方を学ぶのに適した教材であると言える。

(2) 児童の実態

文学的文章の学習は、1学期に「本に親しみ、自分と対話しよう」(教材名「カレーライス」) と「読書の世界を深めよう」(教材名「森へ」)を行った。「カレーライス」では、「ぼく」と「お 父さん」の二つの視点について学習した。「ぼく」の視点で描かれている物語を「お父さん」の視 点で書き換え、「カレーライスの中辛」に対する二人の捉えの違いについて話し合った。「森へ」 では、情景描写の優れた表現を見付け、それらを読み味わう学習を行った。

児童はこれらの学習を通して、視点や立場に気を付けて読むことや表現の工夫に気を付けて読むことができるようになってきている。

本単元は、2学期最初の文学的文章の学習である。1学期の学習を踏まえ、作品の場面設定や

人物の関係などをより主体的に読み取ることができるようにさせたい。

また、高度な内容の理解が難しい児童も参加でき、一方で理解力の高い児童も満足できるような授業を展開していきたいと考えている。

5 指導の構想

(1) 「山のいのち」「海の命」の読み取りを通して、物語の読み取り方を学ばせ、物語を読み深める楽しさを味わわせる。その後、同じ作者の「いのち」シリーズの他の作品を読む時間を設定する。 同一作者の同一テーマのシリーズ作品を読むことを通して、共通したテーマについてより深く考え、読書を広げる楽しさを味わわせていく。

今回の学習指導要領の改訂では、基礎的・基本的な知識・技能を習得・活用し、課題を探求することの重要性がうたわれている。このことから、文学的文章の指導においては、物語を読む際に必要な読み取り方を学ばせ、その技術を他の作品の読み取りに生かし、読書活動を充実させていくことが大切であると考える。

そこで、本単元の教材を読み取る活動では、扱う教材の特性と児童の実態を踏まえ、習得させたい読み取り方の技術を明確にして指導することとする。課題についてよく考えることで思考力を働かせながら、深く考えることの良さや読み取って気付く楽しさを味わわせていく。そうすることで、物語の読み取り方を習得・活用させながら、深く読み取ることの経験を積ませていきたいと考えている。

その後、同じ作者の「いのち」シリーズの他の作品を読む活動を設定する。この活動においては、主教材、副教材で学習した物語の読み取り方を基にして児童が主体的に課題を探求する学習を構想していく。具体的には、自分が選んだ作品を自力で読み取り、同じ作品を選んだ者同士のグループで、作品の読み取りについて検討する活動を行う。そうすることで、「いのち」シリーズの作品に描かれた作者の「いのち」観を考えさせる。しかし、高学年では、授業時数に余裕がない。そこで、他の作品を読む活動は時数外の朝読書や家庭での読書とし、作者の「いのち」観をどうとらえたか、それについて自分はどう思うかということを考える活動のみを本単元の中で行っていく。

(2) 物語の読み取り方を学ぶという知的な学習と物語を読み味わうという情的な学習を、単元や1時間の授業の中にバランスよく取り入れる。深く読み取る活動で思考力を働かせるとともに、読み味わう活動で感性・情緒を育む。

言語は、思考やコミュニケーションの基であり、国語科の学習において言語の力を育むことは、 非常に重要である。しかし、一方で、言葉は内容を表したり伝えたりしていることを忘れてはな らない。特に、教科書で扱われている文学的文章の教材は優れた文学作品が多い。文学的文章の 学習においては、読解の技術や表現の技術だけではなく、作品の主題や登場人物の生き方といっ たことからも学んでいくことが必要であると考える。

また、読むことを楽しみ、読書経験を豊かにするためには、児童と作品との距離を縮めることが大切であると考える。低学年なら動作化、高学年でも繰り返し音読することや好きな部分を暗唱すること、イメージを絵に表すことなど、児童が主体的に繰り返し作品に親しむことを大切にしたい。そうすることが、児童の感性や情緒を育み、その後の読書生活を豊かなものにすると考える。

そして、さらに、作品や作者に対して自分の考えをもつことを重視していく。数年前から、PISA調査の結果が大きく取り上げられ、国語力の低下が叫ばれている。その調査結果で問題となったことの一つが、無答率の高さである。課題に対して自分の考えを書くことができなかったのであ

る。教科書に掲載されている文学的文章は完成度が高く、児童が批判的に作品を考えることは難 しいが、「あなたは、作品のどこが良いと思うのか」「なぜそう思うのか」「作者の考えをどう思う か」など、児童それぞれが自分の考えをもつことを大事にする授業を構成していきたい。

6 指導と評価の計画(全14時間 本時 12/14時)

時	主な学習活動	評価規準(B)の状況		評信	五観	点		十分満足できる	努力を要する (C)
		【評価方法】	関	読	書	話	言	(A)状況	状況への手だて
	「山のいのち」を読	自分から進んで分か						たくさんの言葉の	調べた結果の発表時
1	み, 難語句の意味を	らない言葉を見付け,						意味に興味をも	間を設け、調べきれ
	調べる。	意味調べをする。【授	\circ	\bigcirc			0	ち,調べている。	ない児童もノートに
		業中の様子・ノート】							記録できるようにす
									る。
	「山のいのち」の場	場面設定が分かる叙						季節・時間・場所	クラスで話し合い,
2	面設定を考える。	述を見付け出し,場						に関する叙述を見	傍線を引かせること
		面の様子を想像して	\bigcirc	\bigcirc				付け、的確に絵に	で、自分で叙述を見
		いる。【発言・ワーク						表している。	付けられなかった児
		シート】							童も絵に表せるよう
									にする。
	「山のいのち」の登	登場人物の関係が分						登場人物の関係が	クラスで話し合い,
3	場人物の関係を考え	かる叙述を見付け出						分かる叙述を見付	傍線を引かせること
	る。	し,登場人物の関係	\bigcirc	\bigcirc				け, 図に適切な言	で、自分で叙述を見
		を図に表している。						葉を書き込んでい	付けられなかった児
		【発言・ワークシー						る。	童も図に表せるよう
		F.]							にする。
	「山のいのち」の物	物語の発端やクライ						時間的順序を考え	出来事が描かれてい
4	語の構成を考える。	マックスなど、物語	\bigcirc	\bigcirc				ながら, 出来事を	るページを確認し,
•		の中の出来事を整理						端的にまとめてい	物語の中の大事な出
5		してまとめている。						る。	来事とその順序が分
		【発言・ワークシー							かるようにする。
		F.]							
	なぜ、静一はひさし	主人公静一の気持ち						静一の気持ちが変	前時に使用した物語
6	ぶりに声を出したの	が大きく変化した場	\bigcirc	\bigcirc				化するきっかけと	の構成のワークシー
	かを考える。	面をとらえ、その理						なった出来事, い	トを参考にして考え
		由を考えている。【発						たちの死の意味を	るようにさせる。
		言・ワークシート】						考えている。	
	「海の命」を読み、	自分から進んで分か						たくさんの言葉の	調べた結果の発表時
7	難語句の意味を調べ	らない言葉を見付け,	0	\bigcirc			0	意味に興味をも	間を設け、調べきれ
	る。	意味調べをしている。						ち,調べている。	ない児童もノートに
		【授業中の様子・ノ							記録できるようにす
		ート】							る。
	「海の命」の場面設	場面設定が分かる叙						季節・時間・場所	クラスで話し合い,
8	定を考える。	述を見付け出し,場						に関する叙述を見	傍線を引かせること
		面の様子を想像して	0	\bigcirc				つけ、的確に絵に	で、自分で叙述を見
		いる。【発言・ワーク						表している。	付けられなかった児
		シート】							童も絵に表せるよう
				2					

								にする。
	「海の命」の登場人	登場人物の関係が分					登場人物の関係が	クラスで話し合い,
9	物の関係を考える。	かる叙述を見付け出					分かる叙述を見付	傍線を引かせること
		し,登場人物の関係	\bigcirc	0			け,図に適切な言	で,自分で叙述を見
		を図に表している。					葉を書き込んでい	付けられなかった児
		【発言・ワークシー					る。	童も図に表せるよう
		F]						にする。
	「海の命」の物語の	物語の発端やクライ					時間的順序を考え	出来事が描かれてい
10	構成を考える。	マックスなど、物語	\bigcirc	0	1	\bigcirc	ながら, 出来事を	るページを確認し,
•		の中の出来事を整理					端的にまとめてい	物語の中の大事な出
11		してまとめている。					る。	来事とその順序が分
		【発言・ワークシー						かるようにする。
		F]						
	作者が書いている	「海の命」について,					文章に直接書き表	クラスで話し合い,
12	「海の命」とは何か	自分の考えを書き、	0	0			されていない部分	板書を参考にさせる
	を考え,音読する。	「海の命」が伝わる					からも推測し、題	ことで、考えを書い
		と思う場面を音読し					名の意味を考えて	たり場面を選んだり
		ている。【発言・ワー					いる。	できるようにする。
		クシート・音読】						
	立松和平さんの「い	「いのち」について					立松さんの他の物	自分の力で見付けら
13	のち」シリーズの他	の作者の考えをより					語に描かれる「い	れない児童も気付く
•	の作品を読み,立松	深く知り、それに対	\bigcirc	0			のち」を自分で読	ことができるよう
14	さんが考える「いの	する自分の考えを書					み取り、それに対	に、作品を読んだ児
	ち」について意見文	いている。					する意見を書いて	童でグループを作り
	を書く。	【ワークシート】					いる。	話し合わせる。

7 本時の学習

(1) 本時のねらい

- 「海の命」について書かれている文章を物語から見付け、「海の命」について自分の考えを書 くことができる。 (読むこと)
- 「海の命」が一番自分に伝わると感じる場面を選び、音読することで、「海の命」という物語 を読み味わうことができる。 (読むこと)

(2) 本時の字習活動における具体の評価規準と	ト分満足できる(A)状況の判断基準
< B の状況>	< A の状況>
・文章で直接書き表されているところからの	・文章で直接書き表されているところだけでな
み考え、「海の命」について自分の考えを書	く,推測できるところも含めて考え,「海の命」
いている。	について自分の考えを書いている。
・「海の命」ということを踏まえて理由を書き、	・なぜその場面が一番と考えたのか、物語の主
音読している。	題をとらえて理由を書き、気持ちを込めて音
	読している。

(3) 本時の主張

① 「作者は、『海の命』とは何だと考えていると思いますか。」の発問で、直接文章に書いてある内容を正しく理解するだけでなく、文章から「推測」するという読み取りの方法を学ばせる。また、「海の命」は題名にもなっており、題名から主題に迫ることを経験させる。

「海の命」という言葉は、本文中に2回だけ出てくる。1回目は、「大魚はこの海の命だと思えた。」の部分であり、2回目は、「千匹に一匹しかとらないのだから、海の命は全くかわらない。」の部分である。本時では、「作者は、『海の命』は何だと考えていると思いますか。」と発問する。児童は、まず1回目の「大魚はこの海の命だと思えた。」の部分を取り上げ、大魚つまりクエのことだと考えるであろう。作者が「大魚は海の命だ」と主人公に語らせているのだから、その読み取りは正しい。しかし、作者が考える「海の命」は、そのように直接書き表されていることだけではない。与吉じいさが死んだ場面の太一の言葉「海に帰りましたか。」と地の文「与吉じいさも海に帰っていったのだ。」の「帰った」という表現からは、「与吉じいさの命が海に帰っていった」ということ、つまり「与吉じいさの命」も「海の命」と考えることができる。

このように、直接「海の命」と書き表されていない部分から、「海の命」について読み取らせる ことで「推測」という読み取りの方法を学ばせることができる。

「海の命」について考えることができる部分は、上に述べた以外にもある。「千匹に一匹しかとらないのだから、海の命は全くかわらない。」の部分では「海の命」について直接示されているし、太一がクエと対峙するクライマックスでは、太一はクエに「お父」と呼びかけており、この部分からは、作者が太一の父の命もクエの命も同じ「海の命」と言っていることが推測される。このように、「海の命」についての叙述は他にもあるのだが、そのすべてをこの時間に扱うことは難しいことも予想される。児童が気付いたり時間的に扱ったりすることができる場合は扱うが、時間的に難しい場合は与吉じいさの死の場面から「推測」することを重視する。

また、「海の命」という言葉は題名になっており、物語の主題を考える上で大切な言葉である。 そして、題名について考えるということも、大切な物語の読み取りの技術である。「作者は、『海の命』とは何だと考えていると思いますか。」の発問で、題名について考えさせ、主題に迫る経験をさせたい。また、ここで、「海の命」についての作者の考えを探っておくことが、単元の最後の作者の「いのち」観を考える活動につながっていく。

② 自分に一番「海の命」が伝わると思う場面を選び、その場面を音読することで、感性・情緒を育む。

本指導案「5 指導の構想」で述べたように、読み取り方を学ぶといった知的な学習とともに読み味わうといった情的な学習を大切にしたいと考えている。①に述べたような「推測」という読み取り方の理解が困難な児童でも、自分が選んだ場面を音読することでこの物語に描かれている「海の命」のすばらしさを十分感じることができると考えるからである。

そこで、場面を選んで音読する本時後半の活動では、一番「海の命」が書き表されていると考える場面を選ぶ。そして、自分が選んだ場面について、ワークシートに理由を書き記させる。この活動で、本時前半に考えた「海の命」について、児童に自分の考えを見直させたい。また、最後に、数人の児童に選んだ場面や選んだ理由を発表させ、その部分を音読させる。そうすることで、児童はこの作品のいろいろな場面に描かれている「海の命」に気付く。また、作品全体を通して描かれている「海の命」を感じることができる。

(4) 展開

	<u></u>	<u></u>
学習内容・活動	教師の働きかけと児童の反応	指導上の留意点と評価
本時の課題 となる部分を 音読する。	○ 「P.79 もう一度~ P.81 海の命だと思えた。」までを全員で音読させる。	・本時の課題となる部分を全員がつかめるようにする。
題て命分見のる語方にるにるけ味と読学が強い章、考、取	作者は、「海の命」とは何だと考えていると思いますか。 ・ぼくは、瀬の主であるクエだと思います。「太一は瀬の主を殺さなむらですんだ。」と書いてあるからで魚はこの命だと思えた。」と書いるからです。 ・ぼくは、与吉じいさも海の命だとあるからです。 ・ぼくは、与吉じいさも海の命だとき、太一が「海に帰りましたか。」と言っていたからです。 ・私は、太一のお父さんも海の命だと思います。太一がクエを「お父」と思うことにしたからです。	・課題にきる分の全体を受ける。 ・課題には、会社のでは、 を対する。定のの全体のでは、 を対する。とのの全体のでは、 を対したした。とのの全体のでは、 を対した。とのの全体のでは、 を対した。とのの全体のでは、 を対した。とのの全体のでは、 を対した。とのの全体のでは、 を対した。とのの全体のでは、 を対した。とのの全体のでは、 を対した。とのの全体のでは、 を対した。とのの全体のでは、 を対した。とのの全体のでは、 を対した。とのの全体のでは、 を対した。とのの全体のでは、 を対した。とののとが、 を対した。とののとが、 を対した。とののとが、 を対した。とのでは、 を対した。とのでは、 を対した。とのでは、 を対した。とのでは、 を対した。とのでは、 を対した。とのでは、 を対した。とのでは、 を書きまされている所がらる。 を書いている。
この物語の中での番である。 中でのかるとび、音読する。	あなたが、この物語の中で、一番「海の命」が伝わると思う場面はどこですか。 ・ぼくは、太一がクエを殺さなかった場面です。クエが海の命だからです。 ・私は、最後の太一が結婚した後の歯を選びました。選んだ理由は、そこにたくさんの海の命が書いてあると思ったからです。 ・ぼくは、与吉じいさが「千匹に一匹でいんだ。」と言っている所です。太一もその言葉を守って、海の命を大切にしていると思うからです。 ○ 選んだ場面と理由をグループ内で発表させ、音読させる。	・選んだ場面とその理由を書くワークシートを用意する。 ・場面を選び、理由をワークシートに書いた後、グループ活動にする。グループ活動にすることでが選んだ場面や理由を全員が発し、音読できるようにする。 ◆評価 A: なぜその場面が一番と考えたのか、物語の主題をとらえて理由を書き、気持ちを込めて音読している。 B:「海の命」ということを考えて理由を書き、音読している。 【ワークシート・音読の様子】 Cへの支援:前半のワークシートを見直すよう声をかけ、場面を選ばせる。
本時の学習 のまとめをす る。	○ 何人かに発表させる。	・主題をとらえて理由を書いている 児童, 気持ちを込めて音読してい る児童らを指名する。